

聖賢集

入野家

一五

〔解説〕 現行の六行稽古本はかういふ外題のつけ方になつてゐるが、本来「又助住家の段」は「加々見山舊錦繪」の原本にはない。これは「加々見山廊寫本」の第七段目の切であつたのを、後に兩作を撮合して上演するやうになつた結果である。

「加々見山廊寫本」は、寛政八年正月廿九日から道頓堀東の竹本愛蔵座で興行された操芝居で、作者は中村魚眼、正本もこの時の刊行である。

有名な加賀騒動を材題としたものである。今日流布する「金澤實記」などいふ實録物によつて傳へられる加賀騒動の大筋は次のやうである。金澤の藩主前田吉徳の臣大槻内藏之丞君龍をたのみて主君の愛妾お貞の方と通じてその腹に生れたる勢之助を世嗣にして果は主家を横領せんとして主君暗殺を企て、延享四年五月吉徳江戸より歸國の途上礪川を渡る際、野路井又助をしてその馬を水中より刺さしめて吉徳を溺れしめ、これが原因にて間もなく逝去する。ついで家督を相續した長男宗辰を毒殺し（寛延二年）、更に三男重照が家を繼いだのを老女淺岡と謀つて弑しようとしたが、遂に忠臣前田對馬守等の働によつて寶曆七年陰謀露顯して一味の者悉く處刑せられたといふ。

ところで此騒動を始めて劇化したのは歌舞伎の方である。即ち安永九年に京都四條の中村猪八座で「加々見山廊寫本」を興行して居るが、作者は奈川七五三助・奈川龜助である。これを同年十二月十一日から大阪中座でも興行した。中村魚眼はこの作を採つて、後に淨瑠璃に仕立直したものと見てよいと思ふ。

本曲は操りの方では文政七年八月同じ外題で繰返されて居るが、天保五年二月廿八日からの御靈の芝居では「加々見山舊錦繪」の外題で、兩作をつき合せて趣向で上演されて居る。即ちその時の番附を見れば、梅澤村の段、中屋敷の段、水門の段、お初身賣の段、上屋敷の段、筑摩川の段、清光院の段、梅御殿の段、百姓一揆の段、又助住家の段、鶴が岡の段、長局の段、十内住家の段、鏡山揚屋の段、牡丹山敵討の段とかう分れてゐる。これが例となつて後には、「故郷錦繪」の外題で、筑摩川、又助住家、草履打、廊下、尾上部屋奥庭等の中

心として演ぜられるやうになつた。「加々見山故郷錦繪」については次の「草履打の段」に述べる。

地 跡にはつきほな中に。夫も何と言 ば。サ、早う駕へ乗らんせと。地 聞く 又助も。せきくる涙吞込んで。調オ、
ひ寄らん。詞なければ女房も。わざと よりはつと女氣の。思ひ切つても今更 過分な女房。何にも言はぬ忝いと。地
すげなう見せかけて。詞去られた内に。スエチ 胸も塞がる憂き涙。扱はさう 泣かぬ顔する男氣は。フシ泣くよりは
長居も未練な。もうお暇申します。ア かと又助が。知る程せまる胸撫でおろ 猶哀れなり。地 親の心は知らぬ子が。
アコレそれは又どうした事。子迄ある し。調ム、そんなら無理隙取つたのは。調 イヤ、大事の、母様を。餘所へ
中。退去りするが見目でもあるまい。お主の爲おれが難儀を救はん爲。アノ やる事おりやいやぢや。無理もいふま
この求馬が挨拶を。イエ、構うて下 勤め奉公する氣であつたか。コレ又助 い惡さもすまい。コレどつこへも往て
さりますな。退けば長者が二人のたと 殿。あつたかとはエ、聞えぬわいな。下 さんなやと。地 縫い歎けば母親は。調
へ。御縁があらばと 地 言捨てゝひつし 地 不甲斐ない私ちやとて。なぜ談合し オ、よう言うてたもつた。よう言うて
よ。内儀は表口。出かゝる向うへ又吉 て下さんせぬ。お主や夫の爲ならば。たもつたなう。コレ又吉。この母はの。
が。惡さ遊びの走りこく。爰ぢや、勤めはおろか命でも。何の惜しみはせ 行きとむなうても行かねばならぬ。晚
と先に立ち。跡から付いて亡ハの親方。ぬわいな。調 村方から預つた金。定め から父様と寝やらうとも。地 夜の物踏
フシ裾を釣らせて内に入り。調 イヤコ てお前の身の難儀と、思ひ切つた君傾 み脱いで風邪引かぬ様にしてたも。コ
レお内儀。いつ迄べら、待たすのち 城。私や何にも悲しうない。嬉しうて レこちの人。虫押への桑山を。折々飲
やぞいの。身の代の金渡したれば。も、嬉し涙が、と跡は得言はすむ まして下さんせえ。調 オ、坊主が事は
うこつちの奉公人。暇乞ひが済んだら せ返る。心を祭し谷澤が切なさつらさ 苦にせずと。随分そなたも息災でと。

地 表 目 にはほろりと一^{ひょうりく}半。思ひやる程とととなふ聲。調 ハイ又助内にをりまか。アイヤ何事も存ぜぬ我々。ハテナ我故と求馬がつかさ身にかゝる。涙數^{なみだかず}。どなたちやおは入りなされませ。ア。ガマア何は兎もあれ。谷澤求馬へ添^そふ夕暮はフシいと哀れや添へぬらん。地 親方は伸びあくび。調 ハテ扱て死別れもする様に。いつ迄言うても同じ事ぢや。サア／＼きり／＼乗つて貰ひませうと。地 せつき立てられ詮方も涙隠して。調 左様ならば若旦那様。随分お健で。こちの人さらばと地 ばかり口に涙飽かぬ別れの暇乞ひ。哀れを餘所にくつわ^や屋が。無理に押込む籠の鳥。又助猶も手をつかへ。調 ハア拙者めは子^こを。留めるも涙。行く涙いと身に泌^{しみ}む。母親はフシ是非も泣く／＼揺られ行く。地 影見送つて主従が。心は暗きスエテ角行^{かくぎやう}燈。燈す火影も長の夜も。求馬が家來島井又助と申す者。ガ誰あらう安田の御家門庄司様。見苦しき荒^{あは}家へ。御入^{ごいり}來なしくださるゝ段。いか就いて拙者が働き。イヤ申し若旦那。お悦びなされませ。早や御歸參の時節到來。ハア、地 泰や嬉しやと。フシ天方^{てんぱ}に立派の武士。人目を包む深編笠。益御機嫌よく。御座なされますかな。地 求馬は一圓合調 又助は在宿召さるか。地 御意得たし否を尋ぬるは。本國の様子存じてをるたばかり悦んで。此の刀の譯はどうち

斯うと一言の。身の言譯もあら涙。傍に付込む忠義の一心。いかゞはしけん又て川岸に今や來ると待つ。フシ折か
おろく又吉が。コレ父様。何で其助がひるむを得たりと右手の脇腹。骨
の様に叩かれさつしやる。おりや悲しい。口惜しい。コレ小父様。もう堪忍
して下されと。頭是泣く聲又助は。思はず溜息ほつとき。調ハア天なる
かな命なるかな。此の上は何をか包まん。筑摩川にて大殿を。コレ此の刀に
て討つたるは。こなたに罪を負はせんたくみ。斯く顯はれし上からは毒喰
はど血。この又助が死物狂ひ。まさかの時の足手まとひ。エ、邪魔な倅と以
前の刀。地抜く手も見せず又吉が。フシ細首はつしと打落せば。調扱てこ
そく。肉身の子を殺し。主に刃向ふ大悪人。地逃しはやらじと有合ふ竹鐙。
取るより早く突つかくる。ジャ猪小才なと打拂ふ。こなたは剛氣の鋭き白刃。猶も透さぬ求馬が手練。付け入り
ひし。我が身の運命筑摩川。先へ廻つ一角と。思ひ違ひであつたるか。地さ

付込む忠義の一心。いかゞはしけん又て川岸に今や來ると待つ。フシ折か
ら。地車軸を流す雨雷。目指すも知らぬ眞の闇。フシ聞近く聞ゆる響の音。
調是こそ慥に蟹江一角。主人の醫憤お
家の仇。地今ぞ散ずる此の時節天の興
へと小躍りし川へさんぶと飛込んで
オクリ忍ぶ。水底早瀬の大川浪を。蹴立
て、渡りくる。馬の諸足二指三指。さ
しもの名馬も狂ひ立ち。躍り上つて眞
逆様落つる水底あいろは見えず。調勿
體なや大殿様とは露知らず。何なく首
を掻切りしが。地神ならぬ身の是非も
なや。なぜ其の時にこの腕が折れ砕け
はせざりしぞ。百萬石の太守たる。君
を害せし此の又助。日本國の神々の御
罰を一度に受くるとも。よも此の上の
あるべきかと腕に喰付き喰ひいてスエチ
悔み涙にくれ居たる。調ム、扱は倅人
地さ

は知らずして手にかけてし。返らぬ敷取るより早く咽にがはと突立つる。驚に暮す悲しさは。一重の物も粗末がち。きに手負ひは這寄り。詞コレ／＼若旦那。思ひ違ひであつたかとは。チエ、共に死ぬるか可愛やな。詞オ、お前もマお情ない御一言。間違ひでなくて殿覺悟の其の深手。可愛い我が子や夫を先立て。何と永らへ居られうぞ。地此の世の見納め又吉が。顔を一目と這寄の胸が張裂く様にあつたはやい。地親忠義は立つたと心の自慢。今日は吉左右申してくるか。明日はお國の便りが又吉。ま一度母というてたもく。ま一度。鐘一本もつかさうと。思うた事と。地夢にも知らぬ身の科の。仕置は度母というてたもいなる。地ほんに思眼前コレ此の竹鐺。竹鐺の罪人と死へば味氣ない。斯うなる事とは露知ら屍に恥をさらし。諸人に斯くとサ見せず。朝な夕なにいつくしみ。手しほにかさつきの別れの其の時に母様なうと取てたべ。さは言ひながら女房が後で此殺すといふはエ、マ何事ぞ。惨いわい付いて。跡追うたのが名残とも。知らの事聞き居つたら。嚙ぞ吠えをらう不便やと。我が苦痛より堪兼ぬる。夫のなと取付いて口説き立つれば又助もと。説解來た甲斐もなう死別れ。一世歎きを門の口始終立聞く女房が。わつ詞オ、道理ちや道理ちやわやの縁と聞くからは。長い未來で逢ふ事とばかりに聲を上げ涙と共に駆入つて。主殺しの大罪人。親子は一體忤にもならぬ事かと掻口説く。夫婦手に手て。詞ナウ又助殿。始終の様子は聞きも。苦しい最期がさせともなさ。憎うを取交し。叫び歎けばほどばしる。血ました。さぞ口惜しかる悲しかる。地何の殺さうぞやい。憎うて何の殺さ沙は秋の龍田山落ちて流れて。谷川もわしも一諸に死にますと。落ちたる刀うぞやい。長の流浪の其の内にも貧苦。フシクレな。紅染める如くなり。地庄司も悲歎

にくれながら。斯くては果てじと聲は折から息せき庄屋の治郎作。足もいそげまし。詞ヤア懺悔に滅する汝が重罪。殿御歸館の道を變へさせ。人手を借つて主君を害す。誠の敵は望月左衛門。まつた又助が白狀は。反逆人の訴人も同然。功に免じて谷澤求馬。歸參は庄司が刀にかけんナコリヤ。心残さず成佛せよと。地慈悲の一言ハ、はつと。求馬が悦び是とて。夫婦がフシ節義と忝け涙。地ハアコハ冥加なや悦ばしや。詞我を計る謀叛の望月。生きかはり死にかはり。思ひ知らさでヤ置くべきかと。地怒りの面色。コハリ血走る眼。フシ

折から息せき庄屋の治郎作。足もいそぎ。又助殿。惡事の元締望月が。絞取つたるお金まで五ヶ村へ下された其の悦びに抜ひ金を。合直ぐに亡八の親方へ戻していざこざ内儀の身の代。さつぱり済んでもまだ済まぬ。お家を茶発で掻きさがす茶道坊主の成上り。望月。質擧。臼取りの地粉にしてくれうと言合せ。御家老様へお味方と言ふもいそ。待て汝等。詞事の實否を糺すまで無事

に差置く望月左衛門。地我は求馬と諸共に謀叛に興せし輩を密に今より詮義せん。最早歸國と友治の。下知に従ふ遺具旅用意。我は冥途へ旅立ちと。拔身逆手に我が腹へぐつと突込み引廻す。今ぞ知死期と。女房も。劔を抜けば一時に遺具カゝル惜しや此の世を秋の風散りて跡フシなき世の哀れ。地に忠臣のかゝ見山國の御家老。不易の礎。やがて。敵を討亡す。門出を祝する鯨波本國。指して三重へ立歸る